

シリーズ奉仕職を考える Ⅲ

「スピリチュアリティ」（靈性）について

司祭 フランシスコ・ザビエル 高橋 宏幸

第三巻の発行によせて

『奉仕職シリーズ』第三巻が発行のはこびとなり嬉しく思います。今回は高橋宏幸司祭が「靈性」について執筆されています。人間の能力に過剰なほど自信を持っている現代社会では、「靈性」が教会のあらゆる奉仕職の根源になる領域であることを特に強調しなければなりません。したがって、このテーマこそこの『奉仕職シリーズ』の第一巻になるべきものだったと言えます。

キリスト者の奉仕職は単なる自主的なボランティアの働きではありません。ボランティアとは自分の自由意志を動機とする働きです。キリスト者の奉仕職は神の呼びかけに应答することです。自分では行いたくないと思っていることさへも、聖霊はうながすことがあることも聖書を読めばよく分かります。私たちは、聖霊のうながしに应答しないことも出来ずし、拒否することも出来ず。聖霊のうながしに应答の決意をさせるのは人間の霊です。神の霊（聖霊）のうながしと人間の霊の应答の相互作用が靈性です。ですからキリスト者の奉仕職は単なる人間の自由意志による決断が動機ではなく、うながしに対する服従の決断が動機になります。

ペトロは十字架の道を行くイエスに対して、「主よ、あなたのためなら命を捨てます」と断言します。これは自分の意志での断言でした。この断言を守ることが出来なかったのは有名な話です。しかし、ペトロはイエスに、「サタン、引き下がれ」と言われながら、また何度も失敗しながらイエスのあとを、「主よ、どこに行くのですか」と従って行きました。もはや、自分の意志や決断ではなく、イエスの霊（聖霊）とペトロの霊が相互に呼応していたのです。臆病で軽率なペトロが殉教までイエスに従って行けたのは、ペトロの意志ではなく、聖霊のつながしに応答することの出来たペトロの霊性です。

奉仕職に必要なのは、意志以上に霊性です。個人の決断や自由意志を尊重する傾向の強い現代のキリスト者が修得しなければならないものは「霊性」です。教会の奉仕職を強化するためにこの小冊子が読まれ、学習されることを期待します。

日本聖公会東京教区

主教 ヨハネ 竹田 眞

「スピリチュアリティー」(靈性)について

一九九五年三月末より、約一年間にわたって、フィリピンのケソン市にあるローマ・カトリック教会の修道会の一つである、聖ドミニコ会のフィリピン管区の大修道院で、修道士たちと一緒に生活をする機会を与えて戴き、想像に余る程の大きな、また、豊かな実りを与えられましたことを感謝いたします。ここに、今回の研修の第一のテーマである「靈性」(スピリチュアリティー)を巡って自分なりに学ばせて戴きましたことを、整理し、また、思い浮かべながら、幾つかの点を記させて戴きます。

一 はじめに

今回の修道院での研修に当たり、その契機となりましたことや、目的、動機を記すことから始めたいと思います。

神学校を卒業して丁度十年目の折り、ふと振り返ってみますと、洗礼を受けてから既に四半世紀の時間が過ぎ、その中で、キリスト教（信仰）に対する理解や、自らの在り方は、思いますにいろいろと変化を辿ってきました。一つには、神学という学問を通して受ける影響があったことは否定できませんが、一方、毎日の生活の中で起こる人や物事との関わりの中で、他の人々からすれば「何を今更…」と思われるかも知れませんが、改めて「キリスト教信仰の本質とは？」「クリスチャンで在る（在る続ける）とは？」「聖職者に委託されている役割とは？」そして、「霊性とは？」といった事柄に思いを馳せると同時に、これらのテーマを絶えず神様に問い掛け続け、また、自らの中でも確認し続けていくことの重大さを、改めて強く思うようになりだしました。

そもそも、キリスト教信仰に於て、神様の中に生かされている私たち一人一人にとっての最終的、また究極的な目的とは、「神様（イエス・キリスト）に出会うこと」「神様（イエス・

キリスト)を見ること」「神様(イエス・キリスト)と一つになること」であると言えます。そして、現にキリスト教の初期の頃から、多くの人々によって、いろいろな形の運動が展開されてきましたが、その中で人々は、手に取って見ることでできない神様を見、触れようと努めてきました。そのような信仰生活に於ける基本的なテーマや動きの中で、「修道院(修道生活)」というものが作り上げられてきたと理解していました。

このようなテーマを貫いている修道生活とは、単に「清廉潔白な人々」「浮き世離れた人々」「世俗の煩わしさから逃避した人々」の何れの集まりでも無く、言うなれば、最も純粹な形で「神様に出会おう」「神様を見よう」「イエス・キリストと一つになっていこう」という人々の集まりであり、共同生活であるように考えております。そして、このことは、私たち人間の側からの一方的な希望や思いでは無く、神様の、イエス様の方からの願いでもあると思えてなりません。

いろいろと述べてまいりましたが、今一度簡単に纏めてみますと、

- ・ 如何にして、イエス様の思いを私(たち)の思いとし、イエス様の心を私(たち)の心とし、イエス様の歩みを私(たち)の歩みとしていくことができるだろうか？
- ・ イエス様がなされた事と、当時とは異なった形をとるかも知れないけれど、今現在の私た

ちの生活の場に於て、如何に実現していくことができるだろうか？

と言い表せ、また、その道程こそがキリスト教信仰の歩みではなかるうかと思えます。今ここに書き記しましたようなことを、そして、「修道院の歴史」「修道生活」に付いての講演を聴く機会が与えられました折り、そこから示唆と課題を受け、改めて「信仰」「靈性」といったことを思い巡らし、それに付いて更に深めていきたいということが、この度の研修の発端ともなった次第です。

更にもう一つ、これまた個人的なことになりますが、それを付け加えておきたいと思えます。二十五年前、洗礼を受けてクリスチャンとなり、後々神学校、伝道師、執事、司祭というプロセスの中、或いは、毎日の生活の中で、ここに逐一書き記すことは出来ない程多くの、また、様々な出来事がありました。また、いろいろな人々との触れ合いや出来事を通じて、時の経過とともに、自分自身心底「靈性」が欠けているという感覚、しかし、同時にそれに飢え渴いている実感が徐々に強まってまいりました。

適切な例えになるか分かりませんが、どれ程見た目が立派で、格好も良く、内装や、様々な装備がなされていても、肝心要のエンジンという部分がしっかり、力強いもので無ければ、自動車本来の働きをなすことは出来ません。正に、「靈性」とは、自動車に例えるなら、エン

ジンの部分に当たるのではないだろうか。そして、それがしっかりと整えられていなければ、幾ら外側がすばらしく見えても、それはより良く走り続けていくには無理があるのではないだろうか。そのようなことを、（これも聖霊の導き・促しと言って良いのかも知れませんが）次第に強く感じ始めてまいりました。

「自分には、（エンジンに例えられる）「靈性」が欠けている。「しかし、恥ずかしながら今やっとそれに気付き始めた」。「同時に、靈性に飢え渴いているという感覚も、日増しに強くなってきている」。「何とか本物の靈性に付いて学び、それをしっかりと身に付けていきたい」。「更には、これからも、それに（多少変な表現ですが）飢え続けていかれるようでありたい」等といった心の動きが、自ずと「修道院」「修道生活」へとつながっていったと言えます。

この紙面には、言葉足らず故に十二分に書き尽くせていない部分もありますが、右に述べましたようなテーマを基本に据え、目標としている生活、即ち、修道生活の中に身を置き、実際に体験・経験していくことを通して、改めて自らの生活や働きを顧み、或いは、深め、その拠って立つべき所を、自分自身の中にしっかりと据えることができたらというのが、研修を希望しましたそもその理由であると申せます。

二 希望を見出す所 修道院

スピリチュアリティを、日本語では普通、「靈性」とか「靈的」と訳すことが一般的ですが、文字が与える印象や、語感には、何となく多くの人々に、ある種の固さを与えるところがあるようにも思えます。そのような理由から、折に触れてお話をさせて戴く時、敢えて「スピリチャリティ」と、英単語をそのまま使って、話をさせて戴いております。この文章の中でも、そのような理由から、敢えて「スピリチュアリティ」という英語をそのまま使わせて戴くことを、初めにお断りいたします。

「スピリチュアリティ」（靈性）に関する書物は、日本語・英語を問わず、数多く出版されていますが、その出発点は何時でも、聖書、或いは、祈祷書であります。さて、冒頭にも簡単に書き記しましたが、一九九五年の春から約一年間、フィリピンの元首都でしたケソン市にある聖ドミニコ大修道院（本院・SANTO DOMINGO CONVENT）で、幸いにも研修をさせて戴く機会が与えられました。

話が、横道に逸れるようですが、ピング・クロスビーとイングリッド・バーグマン主演の古い映画で「セント・メリーの鐘」という作品がありました。その中で、イングリッド・バー

グマン扮する修道院長（霊母）の台詞に次のようなものがありました。「修道院（修道生活）というのは、この世からの逃避の場所ではない！修道院（修道生活）というのは、希望を見出す所です」。この台詞は、単に映画の中での、と言う以上に、私自身にとっても、大きな示唆を与えてくれるものでした。

一口に「修道院」（修道会）と言っても、様々なタイプがあります。多くの日本の方々もそうであるかも知れませんが、他の方々はともかく、私自身、小さい頃から長い間、修道院、或いは、修道生活というものは、この世から離れて、心静かに、唯々お祈りに専念するというだけにしか思っています。そして、それはひじょうに消極的とも言える、この世から遥かに掛け離れたところにある、私たち世俗に住む者たちとは、大きな隔たりを持っている所であり、また、そういう生活であるという先入観を、長い間、ずっと持ち続けていました。

しかし、実際にそこで生活をし、修道士たちとの交わりを持ちますと、とてもそのような言葉では言い尽くせない程に、深く、広く、そして、大きなものがあることに、否応無く感じさせられます。左記に挙げました、「消極的」「この世から遥かに掛け離れた」というイメージは、次第次第に崩されてまいりました。

さて、少しずつ話をフィリピンでの事に進めていきたいと思います。

日本を発つてから暫く、先方の最終的な受入れが伝えられる迄の間、聖公会の大学であるトリニティー・カレッジで英会話の訓練をしながら過ごしました。そんな矢先、私の何よりも大嫌いなネズミが出、更には、修道院に移ってから間もない頃、再びそこでも同じ事件が起こり、私にとっては極めて悲惨な(?)状態からのフィリピンでの生活が始まりました。そんな矢先、ある衝撃的なのと言ったのか、力を注ぎ込まれた出来事が起こりました。

それは、真夜中の一時か、二時頃だったと思います。気候の影響もあり、寝苦しい最中のことでした。日本を離れる時には、威勢良くと言いますよ、張り切って出かけたものの、いざ来てしまうと、「考えが甘かったかな?」「もっと短期間にしておけば良かったかな?」

「こんな(?)所に、しかも他教派などに来てしまつて…」「日本語が、全く使えないなんて…」等々、重苦しい気分と不安とに押し潰されるのでは無い始め、次第次第にそれこそ苦しくなり、「やはり駄目かも知れない」「自分にはとてもでは無いが、ここでの生活は無理かも知れない」「勢い込み過ぎたのではないだろうか?」、そんな考えばかりが心を占め始め、それこそ不安と恐怖と迷いとで、脂汗が滲み出、思わず体が震え出す位の緊張感が、胸の内に広がり始めていったのです。正直なところ、恥も外聞も無く、「心身共に異様を来す前

に、一層帰ってしまったほうが……とまで、深刻に考え始めました。「荷物だつて大した数は無いし、未だ全部開け切った訳でも無いし……」と、そんなことばかりが、正直なところ頭の中を駆け巡っていました。

そして、「あと数時間の我慢だ。そうすれば明るくなるし、空港も開くし。とにかく、今晚だけ、あと数時間……」等と、今にして思えば、恥ずかしくなるようなことを、真剣に考えていたのです。その直後でした。「夢だったのかな？」と、一度は思いつつも、そうではありませんでした。ふと耳元で、ある声が聞こえたのです。「私が一緒にいる!」「私のところへ来なさい!」と。以後、先程までの脂汗が、まるで嘘のようスツと引いていき、後は得も言えぬような安らぎが、心の中に広がってきました。同時に、「頑張れる!」「やり抜く!」という、まるでついさっき迄とは別人のような、強い気持ちに満たされ始めていきました。暫くの期間、「やはり、あれは夢だったのだろうか?」「幻だったのだろうか?」と疑ったこともありました。しかし、一つだけはっきりと言えることは、「あれは、起きている時に、確かに、はっきりと語り掛けられた声であった!」と。

そのことを期に、一年にわたつての、修道院での本格的な生活が始まったのでした。

三 「ギブ・アップ」の祈り

私が、修道院に移ってから、最初に連れていって戴いたのは、「誓願式」（終生誓願の一つ前の誓願式）でした。本院から車で三時間余り行った所に在るマナックの修道院（分院）でした。ここは、日本で言えば、中学三年か高校一年の年頃の少年たちが、将来の修道士・司祭を目指して訓練を受ける所ですが、幸いにもそこでの最初の誓願式に同行させて戴きました。

式の後、一人の修道士（修練士長）に院内を案内して戴いた際に説明して戴いた、それも心引かれる九枚のレリーフがありました。それは、ドミニコ修道会の創設者である、聖ドミニコが伝えた、九通りの「祈りの姿勢（ポーズ）」をレリーフにしたものでした。跪く、立つ、顔を天に向ける等々、九通りの祈りのポーズが、美しいレリーフになっているものを紹介して戴きました。この九通りの、ドミニコが伝えた祈りの姿勢は、後タリトリート（静想会）の際に、あるシスターから実際に教えて戴きましたが、あたかも太極拳がヨガでもしているかの印象を持ちました。

実は、その中の一つ、何故か私自身の目を引いた、一つのポーズがありました。それは、

両手を十字架のように広げているものでした。それを見た瞬間、私の脳裏に浮かんだ言葉は、「ギブ・アップ」(GIVE UP・お手上げ)でした。どうしても、それが気に掛かったので帰るや否や早速英和辞典で「ギブ・アップ」を引いてみました。単に「ギブ・アップ」であれば、「降参」「参った」「諦め」といった意味が並んでいますが、更にこの言葉を分解して「ギブ」(GIVE)と「アップ」(UP)を引いてみると、ひじょうに興味深いものに突き当たりました。「ギブ」には、「授ける」「伝える」「寄せる」「引き渡す」「期す」「捧げる」「応ずる」等といった意味があり、また、「アップ」には、「上」「近付く」「勢いよく」「結び付く」「残らず」「全部」等という意味があり、実に豊富でした。そして、更なることには、たまたまその夜読んだ聖書(詩編)の箇所が、一四三編六節でした。そこに書かれている言葉は、「あなたに向かつて両手を広げ、渴いた大地のようなわたしの魂をあなたに向けます」というものでした。偶然と言ってしまうまでもありますが、あたかも雷でも撃たれたのように、「まさにこれだ!」といった思いでした。ドミニコが後世に残された祈りの姿勢の一つが、当初自身の目には、単に「お手上げ」としか映りませんでした。実は、ドミニコが大切に続けた「祈り」とは、「神様に全てを捧げる」「神様に在りのままを捧げる」「差し出す」「さらけ出す」とも言えるような、ひじょうに深遠な「靈性」に端を発しているということを改めて思い知

らされるところから、一年にわたる修道院での生活が始まりました。

四 「自らの責任」という厳しさの中で

冒頭に既に書き記しましたが、キリスト教信仰の究極のテーマ、最終的なゴールとは、「神様を見る」「イエス様（キリスト）を見る」という言葉に尽きると言えましょう。それをどのようにして、或いは、目で見るか、心で見るか、体を使って見るか、いろいろあるかも知れませんが、とにかく「神様を見る」「イエス様（キリスト）を見る」ということでありましよう。そして、それはパウロが繰り返し、繰り返し、それこそしつこい程に言っていることでもあります。

それでは、どうしたら神様を見ることになるのか、イエス様を見ることになるのか、どういうことを以てそうということが言えてくるようになるのか、修道生活というものは、まさにこのことを常に追い求めていく生活であります。如何にして神様を見、イエス様を見、そして、キリストと一つになっていかれるかということを究極のテーマとして追い求めていく生活、それが修道生活であると言えます。したがって、この世からの逃避ではありません。

そして、このテーマを追い求めていく上で、いろいろなことが起こります。ある人は、貧しい人々、死に行く人々の中にキリストを見る。あるいは、教育という働きを通して、子供たち、若い人々の中にキリストを見る、そして、それらの人々に仕えていく。あるいは、説教や学問を通してキリストに触れていく動き等がなされます。

ところで、よく「修道生活の中で、何が一番厳しいですか？」と訊ねたこともありましたし、帰国してから、私自身訊かれたこともありました。「朝早く大変でしょう」とか、「お祈りの時間が一日に何回もあって大変でしょう」という質問を、度々されました。確かに、最初のうちは朝四時半に起きることは、大変でもありました。しかし、そのようなものは毎日の生活のリズムとして慣れてしまえば、然程大きな問題や困難ではありません。

寧ろ、修道生活の中で最も厳しいことの一つに数えられることは、「全ての事柄を自らの責任に於て」ということでありましょう。「これは、私の責任に於てなすこと」「これは、あなたの責任に於てなすこと」「これは、私たちの責任に於てなすこと」・「責任」という言葉を、「神様との約束」という言葉に置き換えることもできるでしょうが、であり、その辺りのけじめや区別が、極めて厳しい形で保たれていました。但し、誤解を避けるために一言付け加えるなら、「これは、私の責任に於てなすことであるから、一切他人には手を出させない」とか、

「これは誰々の責任に於てなすとであるから、自分は一切手伝わない」ということでは勿論ありません。

そのようなことを目の当りにさせられて、改めて考えてみますと、厳格な規則一点張りの「律法主義的」なほうが、うるさく、厳しく、煩わしく思えるようで、その実「ああしなさい」「こうしなさい」「こうしてはいけない」「ああしてはいけない」云々を逐一指図をしてくれるというところで、寧ろ楽なのではないだろうかとさえ思われます。それは、「決疑論」というものに通じるのでしようが、あらゆることは律法が決めてくれ、その決められた通りに動けば良いために、自らの責任と決断に基づいて動きをとっていくよりは、遙かに楽であります。

そんなことを思いながら、かつて八代斌助主教が書かれた本の中の一説を思い浮かべました。「思うに、キリスト教国と、キリスト教国でない国民の一番大きな違いは、自分のためにすべき分をわきまえ得るか、わきま得ないかによってしばしば現わされる。キリスト教国の人たちは、『これは自分のなすべき分』、『これはあなたのなすべき分』、『これは私たちのなすべき分』といったことを、きちんとわきまえる教育を受けている」。

この言葉を借りて申し上げるなら、「これは私の責任に於てなすべきことです」「これはあ

あなたの責任に於てなすべきことです」「これは私たちの責任に於てなすべきことです」という
けじめや区別が、修道院の中では保たれていました。

五 「スピリチュアリティ」（霊性）とは？

ある日、若い人たち（終生誓願を志している人たち）の訓練・教育を担当しておられる修
道士に、次のように訊ねたことがありました。

「スピリチュアリティ（霊性）に付いて、どのように思いますか。スピリチュアリティ
（霊性）の中身とは、どのようなものだと思いますか？」と。「因に、日本では一般的には、
きちんと礼拝に出席し、聖餐に与り、聖書を熱心に読み、朝に夕に、或いは、寝る前にと、
熱心にお祈りをすることや、そういう人のことを指して、霊的であるとか、霊的な人という
言い方をよくされているが……」とも加えてみました。すると、それに対する答えは、次のよ
うなものでした。「確かに、熱心に、しかも継続的に聖書を読むとか、礼拝・黙想をする、祈
りを絶やさないことはとても大事なことではある。しかし、それらは寧ろルーティンワーク
（日常の仕事・決まり切った仕事）と言うべきであって、スピリチュアリティ（霊性）を支

えるものでこそあれ、スピリチュアリティー（靈性）そのものとは言い難いように思う。

即ち、右に記した信仰の業は、クリスチャンとして在り続けようとする限り当然為すべきことと言えますが、このような答えを聞いた私自身、正直なところ驚くと同時に、些か大袈裟な言い方をするなら、まるでハンマーでガツンと殴られたかのような印象すら受けました。では、キリスト教信仰に於て、常に大切にされ続け、また、力となっているスピリチュアリティー（靈性）、その中身とは一体何なのだろうか。それは自分自身で生活を通して掴み取るしかないのですが、管区長と副修道院長のお二人は、私に向かって、「とにかく、この一年の修道院での生活の中で、自分なりにしっかりとしましたものを見付け、掴み取って、そして日本に帰りなさい」という勧めと励ましを与えて下さいました。

自室に戻ってから、英語をはじめ、ラテン語の引いてみたり、改めて、何冊かの本にも当たってみました。「スピリチュアリティー」を日本語に訳せば、「靈魂」「魂」といった言葉との関連で、言葉としてはおぼろ気ながら分かりはするものの、もつと深い中身は、正直なところそう簡単には、中々見えては来ませんでした。

ラテン語に於ても、「スピリトゥス」という語には、「呼吸」「熱望」「勇氣」「尽力する」「競合する」等々の意味がありますが、言葉としては何となく小さなヒントのそのまたヒントら

しきものは手にしたような気はしましたが、未だ決して十分とは言えないまま、暫くの間を過ごさざるを得ませんでした。

そんな矢先、偶然、且つ幸いにも、聖トマス大学での「THEOLOGY OF CHRISTIAN SPIRITUALITY」(霊性神学)の授業の中で次のような話を伺う機会がありました。

『「SISTER ACT」(日本での題名は『天使にラブソングを』)という修道院を舞台にした映画があるが、その主題歌の冒頭に「I WILL FOLLOW HIM」(私は、彼(キリスト)に従って行く)という歌詞がある。そもそも「キリストに従う」という言葉遣いは、教会では古くからなされ続けているが、問題は、その従い方であり、そこにスピリチュアリティ(霊性)の核心に触れる大事な意味合いがある」といったものでした。

六 「I will follow Him」

私たち日本人の感覚的なものかも知れませんが、あたかもイエス様を師に見立てて、「三尺下がって師の陰を踏まず」式の物の考え方がるように思います。一尺が約三十三センチですから、掛ける三で九十九センチ下がって、師、即ちマスターの陰を踏まずというのを、私

の英語力ではとても正確に伝えることは出来ませんでした。とにかく、「謙遜」「尊敬」「敬意」を表わす、日本人に古くからある慣用的な表現だということ伝えましたところ、「マスターの後ろ姿を仰ぎ見ながら行っていくことは、何となくイメージできるし、言葉として何となく分かるような気はする。しかし、実際的には良く分からない」という答えが戻ってきました。寧ろ、「I WILL FOLLOW HIM」というのは、イエス様がいらして、その後ろ姿を仰ぎ見ながら行っていくという、言つなれば「控え目な従い方」「控え目な信仰」ではなくて、「SIDE BY SIDE」というような、横に並んでガツチリ腕を組んで歩んで行く。イエス様と結託して、ガツチリと腕を組み、決してその手を離さないような従い方、それこそが「スピリチュアリティ」(靈性)の中身を解く大事なヒントなのであるということを見せて下さいました。

しかし、振り返ってみますと、私自身「恐れ多くて勿体無いから、せめてイエス様の後ろ姿でも仰ぎ見て…」という感覚を、長らく持つておりました。しかし、「SIDE BY SIDE」「イエス様に、これでもか、これでもかという位に食らい付いて行く」という「意気込み」「心意気」「根性」、或いは、そういう形でイエス様と一緒に道を極めていくという意味で、大変妙な日本語を使いますが、「極道精神」という私たちの姿勢とか動き、心の在り様を指して、ス

ピリチュアリーティ（靈性）ということが言えてくるのではということ、大変強く感じました。

私たちの教区主教でいらっしやる竹田主教が、かつて神学教育の会合での席上で、次のような発言をなさったというのを伺いました。「靈性という言葉、自分は『根性』と訳した」と。ところが、その後、「SPIRITUALITY」という言葉をいくら辞書で引いても、「根性」という訳などありません。しかし、何故竹田校長先生（現・東京教区主教）は、そのように訳されたのだろうかという疑問が、以来十何年も私の心の中に残っていて仕方がありませんでした。「靈性」という言葉は、もっと「静か」で、「莊嚴」で、という意味合いの善なものに、よりよって「根性」などという、スポーツの世界に結び付くようなことを仰ることによって、実は「イエス様に食らい付いていく頑固さ」のようなことを言おうとなされたのではと思いはじめました。

そのようなことを思いながら、一回が一週間から十日にわたるリトリート（静想会）に参加させてさせて戴いたり、低所得者居住区（所謂スラム）、病院、学校、職業訓練施設などへ連れて行って戴いたりという中で、豊かな実りにも与りました。しかしながら、そういう状況・環境の中で、現に人間が生きている、そして、そういう状況・環境の中で働いている修

道士たちの姿を見ていますと、何となく修道士やシスターたちの中でイエス様が一緒に働いておられるという、ちょっと理屈では上手く説明できないような思いを、心の中に強く感じました。確かに、二千年前とは状況も、国も場所も違うけれども、同じような動きが醸し出されていたのではないだろうかと思われました。同時に、矛盾するような言い方になるかも知れませんが、修道士たちが仕えている人々は、修道士たちの内に豊かに与えられている様々なもの、スピリチュアリティ（霊性）を引き出し、受け取っておられるキリストで在られるのでは、そんなことも痛感させられ、また、しばしば目の当りにさせられました。そして、スピリチュアリティ（霊性）というのは、何かイエス様を彷彿とさせるようなものではないかともまた、ふと思われました。

そのようなスピリチュアリティ（霊性）に支えられながら、毎日の働きに力を尽くしている修道士たちの一人から、こんな話を伺ったことがありました。

「もし自分が信仰というものを与えられず（持たず）に、つまりはクリスチャン、ましてや修道士でも聖職者でも無かったなら、多分もっともつと楽で、楽しい生活を、この世的にはできたに違いない。しかし、今よりも、もっともつと恐れなければならぬことも沢山あったと思う。と言うのは、物事の基準や基盤というものがはっきりしないから、移ろい易い。

これが流行ればこっち、あれが人気があればあっちというように、フラフラ、フラフラとしていたに違いない。そして、更には、神様よりも人の顔色に絶えず気を取られて、どっち付かずに暮らしていたかも知れない。でも、実際に今自分には、神様やイエス様の言葉や生涯という確固たる基準や指針といったものがある。従って、そういうものが示されているから、こっちとして明るく生きていられるように思うのだ」ということを伺ったこともありました。

或いは、どうしても気になっていたことを訊ねた時、こっちという話をしてくださった方もありました。「修道士と言えども、生きるためには、着るものも、お金も実際には要るのだ。しかし、自分たちは、お金をはじめとして、物に縛られるということだけはないと思う。何故ならば、一つには、死ぬ時には全部置いていくのだから。最後の最後まで、自分がグツと握り締めて、誰にも渡すまいとして抱え込んでいかれるものは、皆無に等しい。だから、かえって気楽なのだ。今持っているものは、預かっていて、それを使っていると思うから、失ったらどうしようとかいう心配は殆ど無いのだ。だけど、もし人が、心の中に多くの恐れや不安を感じるとすれば、それは大抵不必要なものを多く持ち過ぎているからなのではないだろうか。無くても良いようなものを、多く持ち過ぎた時に起こってくる不安というものがあるのではないだろうか。自分たちのように修道院に居ると、かえって持っていないことによって、

魂の健やかさを持てるような気がする」と。

或いはまた、「何時でも、魂や信仰のことを第一位において、ずっと考え続けたり、黙想したり、観想できる生活というのは、ある意味でも贅沢で、恵まれた生活だと感謝している」という気持ち伝えてくださった方もありました。今にして思えば、一年という大変短い期間でしたが、幾つもの実りを戴いて、今度は日本の教会、日本人クリスチャンで在る自分自身の信仰生活を振り返った時に、思ったこと、感じたことを次に述べてみたいと思います

七 ユーモア

先程、「スピリチュアリティ（靈性）」とは、神様・イエス様に、これでもかという位に食らい付いていく心意気・意気込み・根性」というような言い方をしましたが、しかし、その「意気込み」「根性」「心意気」ということを、違った意味で強めていきますと、どうしても人間肩に力が入り過ぎてきて、顔も強ばり、眉は吊り上がり、眉間には皺が寄り、険しい顔付きになってくるものですが、そういう力の入れ方、意気込みになってしまつては、やはり上

手くないと思います。おそらくそこでは、「バランス」というものが失われることにもなってしまうでしょう。

そして、「日本人クリスチャン」という言葉で括ってしまつて良いものかどうかと思います。一つには、ゆとりとリラックスの源ともなる「ユーモア」が、ひじょうに欠けているような気がします。勿論「ユーモア」とは、くだらないジョークやばかげたお笑いとは違います。そうではなくて、心を和ませるものであるはず。よく「日本人はユーモアが下手である」と言われることがあります。信仰を豊かなものにしていくには、どうもユーモアのセンスも必要なのではないかという気がします。

例えば、イエス様が「金持ちが天国に入るよりは、ラクダが針の穴を通るほうが易しい」ということを仰いました。ラクダが針の穴を通る」などという言い方は、一つのユーモア、ユーモラスな物の言い方と言えるように思えます。そして、このイエス様の言葉を聞いた当時の人たちにしても、歯を食いしばつて、肩に力を入れて聴いたというよりも、寧ろ、たいへん微笑ましく聴いていたのではないかと想像します。ユーモアのセンスを私たちが付けるということは、多分イエス様の声をより良く、豊かに、深く聴いていくための、一つの作用になっていくのではと思えます。

何人かの修道士たちにいるような場所へ連れて行って戴いて、その働きを見せて戴いたり、一緒にさせて戴く中で、イエス様の姿を彷彿とさせられるということを先程言いましたが、その時に「霊的な生き方」「霊性が豊かになる」ということは、神様の輝きを映し出すステンドグラスのようになる。光そのものになると言うよりも、神様の光を注がれ、それを見ている者、光に浴している者に、美しさとかゆとりと安らぎを与えるステンドグラスのようになっていくことが、「スピリチュアリティ（霊性）が高まっていく」ことなのでは、という課題のようなものを与えられました。

そして、日本に帰って来てからもいろいろなことを考えさせられますが、大きく二つ、三つのことを申し上げたいと思います。

八 インカルチャレーション INCULTURATION

「果たしてこれが、スピリチュアリティ（霊性）に関係などあるのか？」と思われる方もいらっしやるかも知れませんが、他の教派のことはともかく、私たちのことを省みました時に、未だ未だ遅れていると言うか、努力を必要としているもの一つに、こういうことが

あるのではないかと思います。

それは、日本で福音を宣教するとか、日本で私たちがずっと信仰生活を続けていく、スピリチュアリティ（靈性）を高めていくという時、やはりこれを落としてはならないことの一つは、「日本文化の研究」ではないでしょうか。ただし、「文化」と一口に言っても、伝統・様式・言語・習慣・メンタリティ等多岐に及んでいます。教会、或いは神学校、修道院では、もっともつとその研究や学びを深め、どのようにイエス様の福音をより分かり易く日本人に伝えていくか、そして、何よりも、自分自身の内にとっかかりと植え付け、実らせていくか、その事は必要不可欠ではないかと考えます。

よく渋谷や銀座、新宿などの繁華街で、スピーカーと看板を担ぎ、「あなたがたは罪人です」とやっているのを目にします。確かに、言っていること自体は、聖書の言葉そのものですが、いきなり誰彼問わずに言われた時、はたして何人の日本人が「そうだ、本当にそうだ！」とスムーズに理解、或いは、納得するだろうかと思えます。先ず難しいと思わざるを得ません。見も知らずの人に、いきなり「あなたは罪人です！」などと言われたら、大抵の人は頭に来るか、「余計なことを……」とでも思う方が、寧ろ普通でありましょう。

そもそも、一つには、あのような物の言い方や言葉遣いが、そのまま日本人の文化の中で

生き、日本語という言語を使って生活している私たちにとって、その言葉の意味すること、その言葉が持つ特別な中身を丁寧に伝えること無くして、そのままスツと心に入り込んでくるといって、やはり何処か無理と言いますが、大きな壁のようなものがあるように思えてなりません。

思いますに、日本に於けるキリスト教は、良い意味でも、そうでない意味でも、未だ未だ欧米の影響を乗り越えられないところに在るようにも思えます。遠藤周作という方が、生前度々こういうことを仰っていました。「寸法が、自分の体に全然合わない着物を着させられて、窮屈で、何となく気持ちが悪い」と。それを一つのヒントにしますと、悪い意味では欧米の受売り、兎にも角にも「有り難い、有り難い、有り難い…」というところから、もう一步、二歩と発展していくのが難しい、というのが、ある部分正直なところかも知れません。

しかし、日本人には欧米人と似ている部分もあれば、彼らとは異なった部分、また日本人の持っている、或いは、与えられている素晴らしいものも沢山あるにも拘らず、その辺りのことを、「文化」という面から十二分に研究したり、洞察を深めてきたかという点、未だ大きな課題が山積みになされているのではないだろうか、改めて日本の外側から見詰め返してみた時、そのように思えた次第です。そのようなことから言えば、「礼拝」一つ取っ

てみても、ひじょうに大事な問題に突き当たるはずですし、或いは、聖書を読む（聖書に聴く）時にも、時には私たちに大きな誤解を生じさせてしまうようなこともあるかも知れませんが。

例えば、その一つの例になるかも知れませんが、私自身子供の頃、度々「捨てる」「捨てなければならぬ」という言葉を聞かされ続けてきました。洗礼準備や堅信準備などの折りに、「クリスチャンになるためには、何かを捨てなければならぬ！」という言葉遣いを以て、いろいろなお話を伺い続けてきました。確かに、結果的に何かを「捨てる」ということにもなるのですが、しかし、その前にもう一つ言うべき大事なことがあったのではないだろうかと思えます。否、寧ろ、思えると言うよりも、確信に近いものを持てるようになりました。修道院での生活も、そのことへの大きな影響を与えてくれたものですが、それは「選び取る」「何かを選び取る」「どちらかを選び取る」ということです。

イエス様が公生涯に入られる時、つまり、ヨルダン川で施洗者ヨハネから洗礼を受けられた時、或いは、もつと遡って、聖母マリアがイエス様を生み出す辺りの動きの中で、或いはまた、イエス様のゲッセマネでのお祈りの時、十字架の上、そのような幾つかの、それもひじょうに大事な出来事の際に、「はい、神様、私は何かを捨てます」「天使ガブリエルよ、私

は何かを捨てます」というような受け答えは、見受けられないように思えます。そうではなくて、「神様、私は（これを・この道を・この働きや役割を）選び取ります！」という、極めて積極的な姿勢を貫いています。そして結果、人目には何かを捨てたように見えることが沢山あります。

私たちも同じように、「クリスチャンとして生きる道を選び取る（選び取り続ける）」ということを、神様との応答の中でし続けます。その一方で、確かに日本人は控え目なところがありますから、「積極的に選び取る」と言うよりも「捨てる」、或いは、時には「諦める」と言う方が性に合っているとも言えるかも知れませんが、やはり信仰の核となるようなことに關しては、はつきりとした、積極的な言葉を使った方が良いのではないかと思えます。今、「文化」との関わりでお話を進めていますが、信仰、少なくともキリスト教の信仰生活に於ては、「選び取る」という姿勢は、極めて重要なポイントとなつていますが、それをもしも、いきなり「捨てる」と訳してしまえば、自ずとその言葉の上には、「嫌々」「無理して」「歯を食いしばって」という言葉が載り易くなり、スピリチュアリティ（靈性）を育むのとは、反対の方へ向かいがちになる危険もありましよう。

但し、聖書には実際に「捨てる」という言葉が度々出てきます。だからと言って、短絡的

に考え、今直ぐに「捨てる」とい翻訳されている箇所を、全て「選ぶ」とか「選ぶ取る」と訳し直すべきである、ということが言いたいものではありません。

寧ろ、そのように訳されている言葉の中に秘められている福音やスピリチュアリティ（靈性）に直結するような意味をきちんと押さえ、私たちの中に植え付けていかれるように、そして、それを基にしながら行動を起こしていられるように、或いはまた、そのことに自身自身を深く、より良くコミットさせていかれるようにと、そのために右のようなことを記した次第です。

或いは、「憐れむ」という言葉も、イエス様がなされる時は、必ずと言って良い程、日本語で言う「断腸の思い」、人の苦しみや悲しみを見て取られた時、「自分の胃がキリキリと痛まずにはいられない」といった意味合いと言いましようか、生き方そのものがあります。

そのように考えてみますと、聖書の本来の意味、イエス様の心の奥底にあるものを、日本語という一つの大切な文化の中で、どう訳し、どう伝えていくか、如何に自分自身の中に根付かせていくかといったことを考え、研究し、整えていくためにも、文化を学ぶ必要性を思います。それは、勿論申し上げるまでもないことですが、徒に、私たち日本人が好むようにと、何か大切なものを摺り替えたり、歪曲していく作業では、勿論ありません。寧ろ、そ

のような学びや研究は、如何にして、より正確に神様のみ心を、イエス様のみ心を、私たちの中に根付かせ、開花させていくかへの学びであり、研究であると思います。

九 異なつた「文化」の中でも働かれる神様

私たちが大切に守り続けている「教会暦」は、イエス様の身の上起こつた、たいへん重要な二つの出来事、即ち、ご降誕と甦りを中心にして、そのご生涯を辿るように組み立てられています。その中に「大齋節」というご復活前の期節があります。

大齋節と言えば、極く自然に「克己」「節制」「禁欲」「我慢」等という言葉が頭に浮かんできます。或いは、「修道生活」から連想して「禁欲生活」、つまり「欲を禁ずる」ということを思い浮かべる方々もおられるかも知れません。勿論、ここに羅列した言葉や、それに基ついた在り方も大事であることには変わりませんが、その方向性や目的を誤つて、唯々闇雲に我慢し、耐え忍ぶほうにのみ突き進んでしまうとするなら、それにはやはり限界もあることでしょう。

ところで、聖書や教会の伝統的な教えの中では、果たしてそのようなことを言っているの

だろうか？という疑問も、実は一方で私自身の中にもありました。だからと言って、既に書きましたように、「克」「節制」「禁欲」「我慢」等というものを軽視している訳ではありません。しかし、これらもまた、翻訳の一つに数えられますから、念のために基になっている言葉に触れておきますと、「禁欲」の基になっているのは、英語では「EXERCISE」（エクセサイズ）という言葉でした。普通「エクセサイズ」といえば、「運動」と訳すことが多々ありますが、更に英語の基になっているラテン語では、「外へ追い出す」「働くために外へ出す」、或いは、「体を動かす」「訓練に励む」という意味の言葉のようです。

或いは「忍耐」という言葉にしても、「グツと歯を食いしばって耐える」という感じよりも、「あるものの基に留まる」「そこにしっかりと身を置く」というのが元々の意味のようですが、「ここでの」「何処に」「誰の基に」に付いては、今更くどくと書き記す必要は無いように思います。

ここでは、文化の一要素である言語・言葉を主として書いていますが、その大事な文化である言葉を、もしも誤って使ってしまったり、安直に使ってしまったりということが起こるとすれば、それはそのまま私たちの信仰やスピリチュアリティ（靈性）、その形成、成長にも影響してくるに違いないと言えますでしょう。

もし仮にイエス様がスツと現れて、幾つかの訳語をご覧になるか、お聞きになられたなら、「ちよっとそれは?」と言って、首を傾げられるものも随分あるのではという気がします。それだけにこそ、広い範囲にわたつての文化の研究、学びは、教会とその信仰にとつても大きな課題となり続けていくのではないのでしょうか。

これはある意味で、私自身の想像の域を出るものではありませんが、イエス様であれば、各々の文化やそれに含まれる様々なものを認められた上で、更に育んでいくべきものは育み、改めていかなければならないものは改めていかれ、省みるべきものは省みられた上で、時には、イエス様の教え・福音と真向から衝突するものもあるでしょうが、それを乗り越えていられる中で、私たち日本人にも良く分かるような、或いは、心の中にスツと入り込み、染み渡ってくるような働き掛けをなさるのではないのでしょうか。神様は、イエス様は、私たちに日本語で、福音や促しを語り掛け続けられることでしょうか。日本という土地や文化の中でも働かれるに違いありません。そして、そういうことの中で、変えてはならないもの、変えていかなければならないものと両者があるでしょう。しかし、多少乱暴な言い方をするならば、唯々欧米のままを頂戴してきた時代は、そろそろ一つの区切りを付けて、改めて私たちの文化をきちんと捉えた上での福音の聴き返し、捉え返しのようなことをしていく時ではな

いだらうかと思えます。

十日常生活の中での「スピリチュアリティ」（靈性）

更にもう一つは、日本の教会へのチャレンジとも言えることですが、それは「靈的成長」「スピリチュアリティ」（靈性）を高めていく」ことに通じていくテーマであり、それが今再び与えられているように思えます。

それは、信仰とは知識や認識の問題ではなくて、あくまでも「私（たち）の歩み方」の問題であるということです。しかも、その歩み方とは、「如何に立派で、崇高な人になるか？」を第一のテーマとしたものではなくて、神様に造られ、様々な目に見える、見えない賜物や恵みを戴いているにも拘らず、なかなか十分にはそれに応えていない自分自身というものを、先ずはしっかりと、謙虚に見詰める。そして、そのような欠点や弱点をも込みで、私（たち）を受け容れてくださり、そういう私（たち）の中で働き続けてくださる神様に感謝をしたり、賛美をしたり、懺悔をしたりという動きを取りながら、神様の愛を精一杯受け止めていこう、そして、それに対して応えていこう、自分の方から何かを捧げていこうという歩み方こそ

が「信仰」、少なくとも「キリスト教の信仰の歩み」ということであり、それこそが「スピリチュアリティー（靈性）」であり、その成長であると言えるように思えてなりません。

適切な例になるかどうか分かりませんが、例えば車を運転する人はゆったりした姿勢をとって、ゆったりした気持ちでハンドルを握っている時には、自然と良い運転ができるのと同じように、信仰とかスピリチュアリティー（靈性）というものを考えたり、深めていく際にも、余りに固くコチコチになって、ゆとりとかユーモアがすっかり欠け落ちた状態でやっているとすると、折角神様から瞬時、瞬時、注ぎ込まれているものに対して、極めて鈍感になっていく危険があるようです。良くない意味で、自分をガツチリとガードしてしまいますから、それが大きな、固い壁のようになってしまつこともあるでしょう。固い、固い煉瓦は水を吸い込みませんけれども、柔らかいスポンジは水を吸い込みます。そこで、スピリチュアリティー（靈性）とか、その成長とは、神様に注ぎ込まれているものに敏感になっていくことであるとも言えます。そして、更にそれは、神様と私（たち）との共同作業でもあるはずで、諸々の賜物や、恵みを、注ぎ込まれる方と、注ぎ込まれる方との共同作業ですけれども、もし仮に、こちら側がそういう動きを止めてしまつたら、その時、その瞬間、日本語での駄じやねのような言い方になりますが、「靈性」は「零性」「冷性」となってしまつ危険性を大

いに孕んでいると言えましょう。

では、「スピリチュアリー（靈性）を高める具体的なやり方があるのだろうか？」という問いも、当然起こってくると思われれます。その一つに、「靈操」(SPIRITUAL EXERCISE) というものがあります。これは、毎日の積み重ねが必要ですので、「ちょっと試しに…」という訳にはまいりませんが、一つ、「このような感じ」ということだけは申し上げられるかも知れません。

例えば、「ご復活前の一週間を「聖週」とか「受難週」と言いますが、その中でなされた「最後の晩餐」を、一つ例に取り上げるとすれば、次のように言えるかも知れません。

勿論、私たちに与えられている想像力もふんだんに用いなければなりません。最後の晩餐」の食卓に、自分自身も参加していると、そこには、どのような顔ぶれが、どのような位置し、どのような食べ物と並べられ、どのような雰囲気を出しているか。料理は温かいのか、冷めているのか、自分は何処に座っているか。イエス様の近くか、真正面か、イエス様からは見難い所か。弟子たちは、どのような面持ちで、イエス様と一緒に、最後の食事をしているだろうか。イエス様は、弟子たちに、どのような口調で語られ、どのような眼差しを向けていらしただろうか。そのようなことを臨場感を加えながら、勿論、福音書を根底に

置きながらということが大切ですが、想像してみる。それを積み上げたり、繰り返していく中で、少しずつイエス様と相対していくような心の動きとなり、「イエス様と一緒に！」という気持ち、徐々に高められていくようになります。そして、そういう心の変化と言いますか、イエス様への思いが、更には、いろいろな形で具体的な奉仕の働きや活動へと繋がりはじめていくというようなことです。

或いは、別の適当な箇所を挙げれば、十字架に先立つてなされた、総督ピラトの官邸での裁判の場面なども良いかも知れません。

イエス様が裁かれていらした時、自分は一体何処にいたのだろうか。ピラトは、どのような面持ちをしていたのだろうか。どんな口調で、話をしていただろうか。自分がイエス様を見捨てたり、裏切ってしまったと痛感した後、どういう行動をとったのだろうか。何か言っただろうか。言ったとすれば、何を、どのように言っただろうか。

このようなことを、まずは、善し悪しの判断や評価を抜きにして、自分自身や、その心の内に、今置かれている状況や環境の中で起こってきたことを見詰めていきます。

但し、難しいことはありませんが、このようなことの中で常に置き去りにしてはならないことがあります。敢えて申し上げる迄も無いかも知れませんが、それは、「神様の視点（視

線)「イエス様の視点(視線)」です。従って、「私はこう考える」「私はこう思う」「私はこんなふうに想像した」ということだけに終始してしまうと、それはかえって大きな落とし穴にもなりかねません。

そして、当然これだけを以て、私たちのスピリチュアリティ(靈性)は、間違いなく最高潮に達するという訳では勿論ありませんが、その大きな一助となっていくには違いありません。

「ここで一言「靈操」に付いての一節を書き記しておきたいと思います。

「靈操とは、良心の糾明・黙想・觀想・氣付き・口禱と念禱のあらゆる方法を意味する。また、他の靈的修業も意味する。散歩したり歩いたり走ったりするのを体操と言うが、同じように、靈魂を準備し整えるあらゆる方法を靈操と言うのである。その目的は、まず、乱れたあらゆる秩序のない愛着を棄てることであり、自分の生活を整えることについて神のみ旨を探し、確かめることである」「靈操によって、聖靈の動きにもっと心を開き、敏感になることができる。また、心の中にあるさまざまな悪への傾きや、罪の暗闇に光をあてるためのものである。さらにまた、神の愛にいつそう忠実に応えられるよう、力づけ支えられるため

のものである。「靈操はいつも、祈りである。靈操に入る人にとって、開かれた惜しみない心が特に大切である」（以上、イグナチオ・デ・ロヨラの「靈操」より抜粋）

他方、今度は正反対に、私（たち）のスピリチュアリティ（靈性）を妨げていく、或いは、衰えさせたり、萎えさせたりしていく動きも、一方にあることも加えておきたいと思えます。

「極端な」という言葉をその上に付け加えて申し上げたほうが良いかとも思いますが、「（極端な）自己満足」「（極端な）自己陶醉」「（極端な）自己卑下」「（極端な）自己逃避」といったものですが、これらは多分、十中八九私（たち）の靈的成長を妨げるものとして挙げられます。先程の言葉を使って申し上げるなら、これらのものは、私（たち）の「靈性」を、「零性」或いは「冷性」へと行き着かせる、最も手っ取り早いものとも申し上げられるでしょう。

十一 これから

スピリチュアリティ（靈性）に付いて、幾つかの事柄を、私自身の修道院での体験、経験などを基に書き記させていただきました。

手短に「結論はこつだ!」ということは書けませんし、また書くべきものでもありません。また、靈性に付いているいろと多岐に渡って知っているということと、実際に靈性を高めていく、育んでいくということとは、当然違います。

また、心の領域の問題、或いは、学問的な領域や文化にも及んでくる問題もありましょう、毎日の日常の中での積み重ねの問題、そして、この私(たち)には、どのような形でのイエス様への従い方があるのかという、道を極めていく心意気と言えるような問題、また、それをどのように深めていくかという選択の問題等々、いろいろな角度からのアプローチや、実際にしていかなければならない課題があります。

また、先程の繰り返しになります、唯々心静かにお祈りをし、聖書を読み、黙想する、それらは大切な信仰の業であることは、正にその通りですが、そのことを指して言うのではなくて、寧ろ、それらがスピリチュアリティー(靈性)の土台となって、イエス様に従っていくための方向や実際の動きへと繋がっていく、その全体を指してスピリチュアリティー(靈性)と捉えてよろしいのではないかと思います。

多くの方々にとっては「今更:」と思われるかも知れませんが、私にとりましては、「やっ」という表現の方が近いように感じますが、取り分け、修道生活をさせて戴くことを通し

て、少しずつ、しかし、確実に手にでき始めてきたように思います。しかし、更に大切な問題は、ここに学ばせていただいたこと、気付かせていただいたこと、教えていただいたこと等を、これからの生活の中、また日本での様々な生活や、働きの中で、如何に整えられているかという次なる課題が与えられています。

十二最後に

この度の修道院での研修に当たりまして、その機会を備えてくださいましたことを、ここに改めて感謝申し上げます。

特に、東京教区・竹田真主教様、東京教区聖愛教会、東京教区聖職養成委員会の皆様、また酷暑の中、修道院をお訪ねくださった竹内謙太郎司祭に、心から感謝を申し上げます。

また、教派を超えて、快く受け入れてくださり、多くの実りを与えてくださいました聖ドミニコ修道会フィリピン管区管区長ペドレゴサ神父、聖ドミニコ大修道院院長アラルコン神父、修練長クルーズ神父、每晚英語の指導をくださったポサダス神父、聖トマス大学で教鞭をとっておられる神父の皆様始め、全ての修道士、シスター、また、フィリピン滞在

中、様々なご配慮を下さいました東京教区より出向しておられる遠藤雅己執事に、この上ない感謝の意を表します。

十三 参考図書

スピリチュアリティ（靈性）に関する書物は、古今東西を問わず、数限りなくありますが、ここにその内の幾つか（極く僅かですが）を最後に挙げておきたいと思います。

- ・キリスト教神秘思想史 中世の靈性 J・ルクレール・F・ヴァンダンブルーク著
- ・聖性の理想 SMP・ガブリエル著 カルメル会訳 聖母文庫
- ・中世の修道制 上智大学中世思想研究所編 創文社
- ・靈操 イグナチオ・デ・ロヨラ著 ホセ・ミゲル・バラ訳 新世社
- ・靈操の現代的読み方 デイヴィッド・フレミング著 新世社
- ・日常を神とともに モーリス・ズンデル著 福岡カルメル会訳 女子パウロ会
- ・断想（足下を深く掘れ） 奥村一郎著 女子パウロ会
- ・SPIRITUAL THEOLOGY JORDAN AUMANN, O.P. 著
- ・A HISTORY OF CHRISTIAN SPIRITUALITY (Volume I - III) BOUYER 著

シリーズ奉仕職を考える Ⅲ

「スピリチュアリティ」（靈性）について

司祭 高橋 宏幸

発行 日本聖公会東京教区宣教委員会

〒105 東京都港区芝公園三 六 一八

TEL 〇三(三四三三)〇九八七

FAX 〇三(三四三三)八六七八

制作協力 東京教区広報委員会

初版 一九九七年二月三日